



## 植 物 観 察 (7)

去る7月21日、元麻布大学教授（生態学）高槻成紀先生による玉川上水観察会に、小学校2年生の息子と共に参加しました。小金井桜の整備区間においてはサクラ以外の樹木の多くが伐採されているため、雑木林に生育する野草に代わり、ススキやノカンゾウなどの草原性植物やツル植物、ヨウシュヤマゴボウのような外来植物が目立つとの説明を受けました。園芸感覚でサクラだけを守ろうとする行為は、野草の保全には危険であるという言葉が印象的でした。

以前は玉川上水に興味を示さなかった息子ですが、最近では玉川上水を歩きながら「この花は何？この実は食べられるの？」などと聞いてきます。こだまの方々と植物観察を続けているおかげで、息子に色々なことを伝えることができます。玉川上水がどうあるべきか、息子と話しをする日も近いかもしれません。  
< O.Y. >



### 玉川上水の水が、皇居の外濠へ！内濠へ！

8月10日の読売新聞夕刊では、「玉川上水から再生水」「水の都へ 清きお濠に」と言う大きな見出しが踊りました。

これは、都心の外濠や日本橋川などの水辺が汚れて、アオコの発生や臭いを放つなど、以前から問題になってきたことの解決策として、また温暖化で苦しむ「東京オリンピック・パラリンピック2020」に向け、都心の五つの大学（中央、法政、東京理科大学、日本、東京）の専門の先生方や玉川上水流域で活動する市民団体「玉川上水ネット」（当会は小金井市で唯一の参加団体）「国際ロータリークラブ」などが一丸となって提案してきたものを、都がオリンピック後の都市計画、「水の都構想」の中核事業とすることに正式決定したと報じたものです。

玉川上水は今から約360年前に江戸市民の飲料水の確保のために造られた人工の水路ですが、昭和40年に淀橋浄水場が廃止されてから、小平監視所下流は空堀になり、環境悪化。昭和61年からは環境維持のため、この部分は「清流の川」として復活し、再生水（下水をオゾンなどで高度処理）を環境用水とし、流して現在に至っています。徳川家康が江戸に幕府を開いてから、50年後（1653年）につくられた玉川上水は、高い「羽村堰」から低い江戸市中に自然流下する方式で造られ、現在でも動力なしで都心に水を運ぶことができます。しかも開渠の水路は、途中の市区部に水と緑の供給ができ、放射冷却などの効果も期待が出来ます。今の時代にも求められている大変優れたもので、未来の東京にも欠かせないインフラとして、これからもその歴史を刻んでいくことになります。

④

玉川上水

# こだま通信

発行：小金井玉川上水の自然を守る会 代表：加藤嘉六  
E-mail：kodama2107kodama@yahoo.co.jp  
https://kodama201803.jimdo.com

2019年11月1日 No. 7

玉川上水 小金井橋下流の北側 桜並木復活事業のために伐採されます  
この緑陰をなくしていいの？！

①